



埼玉県狭山丘陵の雑木林。東京近郊のに雑木林が作られたのは江戸時代。当時、世界一の大都市に発展した江戸の住民に燃料を供給するために、クヌギ・コナラなどの薪炭林がつくられた。雑木林は周期的に人の手で伐採されることで、日当たりを好む植物や日陰を好む植物まで多様な自然が維持される。写真・宮入芳雄

小林 一郎

こばやし・いちろう 1969年東京都生まれ。環境サイエンス・ライター。半導体、環境浄化のエンジニアを経てフリーランスに。科学技術社会論を中心に持続可能な社会の実現に向けた様々なとりくみを取材執筆している。共著に『非戦』『地球が危ない』『戦争をしなくて済む世界をつくる30の方法』など。



持続可能な社会に必要なこと。



石川英輔

いしかわ・えいすけ 1933年京都府生まれ。武蔵野美術大学講師。61年ミカ製版(株)創業。85年より専業作家となる。科学技術的な立場から見た江戸時代の資源、エネルギー、環境問題についての著作が多い。著書に『ボンゴロボット太平記』『大江戸えねるぎ事情』『大江戸リサイクル事情』などの大江戸シリーズ、『大江戸神仙伝』『大江戸仙境録』などの小説ほか多数。

里山のエネルギーを効率よく使いながら、循環型社会をつくりあげた江戸のまち。化石燃料依存から抜け出るモデルであるが、そこにいたるには心構えが必要だ。(写真・瀬崎直俊)

小林 以前、私は半導体のエンジニア、次に微生物による環境浄化のエンジニアをやっていました。その頃は技術の力で環境問題を何とかしようと努力していましたが、エネルギーの大量消費や廃棄物の問題など、社会の仕組み自体に問題があると思ったり、たとえば税のかけ方や意志決定のあり方などに興味をもったのです。それから社会で起きている矛盾を、科学的な視点から書くようになりました。私が変わっていく大きなきっかけに、石川さんの著書がありましたので、お会いするのを楽しみにしてきました。今日は森と街ということがテーマですが、江戸時代の森と、それ以前の森とは大きな違いがありますね。

江戸という循環型社会

石川 江戸時代の人口密度は世界最高ですよ。狭いうえに平地の少ない国土に3000万人も暮らしていた。この人口を維持するには、それ以前の自然では絶対に無理です。

1600年から1700年のはじめにかけて人口は1200万人から3000万人に増えています。なぜかといえば、食糧生産が増えたんです。3000万人に増えたところで人口は横ばいになってそのまま暮らままでいきます。この狭い国土で3000万人が循環型で生きる社会に変えたわけですよ。生きるために一生懸命やっついていくうちに、太陽エネルギーを効率よく利用して生き

延びる方法にたどり着いたわけです。歴史家のように、封建主義から資本主義なんて見方をしていたら江戸時代は見えてきません。

日本人はヨーロッパ人を尊敬していますが、だいたい、ヨーロッパ人が飢え死にしなくなったのは、彼らが植民地を作り始めてからです。南米やアフリカ、アジアの人間の上前をピンハネして、華麗なヨーロッパ文明を築いたわけですよ。その後ろにはアジアやアフリカの人間の血と涙があるんですよ。

小林 現在の日本で起きていることが、ヨーロッパ文明のなれの果てなのかもしれないですね。江戸時代、人びとの暮らしのなかで循環を維持するため、町と里山とがつながりながら、人間が手をつけな

い奥山が守られてきたというバランスが非常に重要だったと思うのですが。

石川 そういう形を作るのに3000万人の人口が必要だったとも言えるかもしれないですね。3000万人まで増えたところで、うまいこと循環できるようにって安定したのだと。

私は、敷地内を里山かビオトープみたいにしていくんですけども、これを維持する大変さは想像を絶するものです。放っておけば草に食い殺されます。蚊はすごいですし。「自然があつていいですね」なんて言う人もいるけど、裸で5分でも立ってみると(笑)。「自然のある暮らし」なんて、ちつともいいものじゃない。タケノコは所かまわず生えてくるしね。

頭のなかの里山は美しいんだけども、実際にこれを維持するのはものすごく大変なんです。だから人間がそういうものを壊してきた理由も、私はよくわかります。本当のことを言えば、この土地を何十億円かで買ってってくれる人がいれば、すぐに売り飛ばして、汐留の高層ビルを買って引越したいですよ。

小林 いやあ、石川さんは文句を言いながらずっと住み続けるんじゃないですか。
石川 面白いことは面白いんですけどもタケノコを10本くらい採って、2本だけ私が食べて、あとはみんな近所に配りました。椎茸も作れるし、梅もなるし。

うちには家庭菜園3原則というのがあつて、第1条、家庭菜園の野菜は安全でなくてはならない。第2条、家

庭菜園の作物は外観を気にしてはならない。第3条、上記2カ条に反せぬ限り家庭菜園といえども経済性を重んじ、効率を重んじなければいけない。

小林 さんは堆肥は作れますか？
石川 ええ、作ったことがあります。

私か堆肥を作り出したとき、最初の本を読んでやっただけで、最初の2年はずいぶん堆肥にならなかつたですよ。本ではきれいなこと、整合性のいいようなことが書いてあるけど、やってみるとぜんぜん整合性が良くない。

エネルギーの使用量が半分でも困らない

小林 もともと武蔵野は関東ローム層で土が痩せていて、農業にあまり適さない土地だったはずですが、人びとは雑木林を育て、落ち葉をすき込んで土をつくってきました。埼玉県の川越と所沢の間に広がる三富新田の平地林は世界的に有名になってきています。川越藩主だった柳沢吉保の命で開墾された地域です。この雑木林を見ていて面白いのは、木の植え方の技術ですね。たとえばアカマツが畑のそばに生えると、雑木林の真ん中に移植するんです。肥えた畑の土で育つよりも、栄養の少ない場所で育てたほうが木が縮まるといって。そういう木を雑木林で育て、農作物がとれなかつた年にはそれを売って食い足りないしてました。

三富のお年寄りに聞いたんですが、江戸時代、飢饉のときに人が逃げてこられるような場所が家々の庭につくつてあつ